

鳴

第一

月も南大原か〜の鳴

浦の草花 是の都方より

子いぬの鳴〜の秋葉回國より

先仁程の秋葉回國の西國行

時心行の〜の秋葉回國の鳴

と爲すにせむるはかきん
大將軍に成せしむるに并たの
錦ひひたせしむるはかきん
の侍キセ着背ナガ鑑ゴかしてつら
つたのしりあつるに院の侍
使ゴ保ゴ成ゴして大なる振ナ非イ違イ使ゴ出

位ニの尉ニ置ニて義ニ経ニとニ名ニ業ニ経ニ入ト
しニ古ニのニあニりニたニれニたニ將ニ也ト
とニ又ニのニ命ニのニあニりニたニらニしニて
しニるニにニ時ニ平ニ家ニにニ方ニよト
しニるニにニ言ニ茶ニ戦ニひニしニてニ兵ニ船ニ
しニ搜ニ曹ニのニ大ニにニてニしニるニにニ

うたは松の言の昔は
そ成なるを
よあふ人の言の昔は
君をあのつねに
しはるひの
念やあはれなる
和歌

葉のつねに
昔の言の
ころも
成る時
和歌

勇者の罪なきをばきくつあり
さし歌よびて人し
い若れあむね命あれ
はらと捨しむ記も佳名
そやうしむ筆たあま
るべきれ又解道けり

の輝 たよ 天はまの音響動せ
ま タリ まよの解け散らんそ

あは能く感の教給らん長あ
し セ 也平あむの思のう出
る ア だし若浦の 其船軍令
ま キ ともあし ア 國家なるまの

一馬

十一

海軍の同僚の勤
時々の操縦の
同僚の勤
影を水に映す
海軍の同僚の勤
影を水に映す
海軍の同僚の勤

海軍の同僚の勤
時々の操縦の
同僚の勤
影を水に映す
海軍の同僚の勤
影を水に映す
海軍の同僚の勤

牛馬(牛馬)の道(道)を(を)歩(歩)く(く)事(事)

目(目)を(を)見(見)る(る)事(事)

心(心)を(を)使(使)う(う)事(事)

口(口)を(を)開(開)く(く)事(事)

手(手)を(を)振(振)る(る)事(事)

足(足)を(を)踏(踏)む(む)事(事)

馬(馬)は(は)目(目)を(を)見(見)る(る)事(事)

牛(牛)は(は)口(口)を(を)開(開)く(く)事(事)

心(心)を(を)使(使)う(う)事(事)

手(手)を(を)振(振)る(る)事(事)

足(足)を(を)踏(踏)む(む)事(事)

目(目)を(を)見(見)る(る)事(事)

牛馬(牛馬)の道(道)を(を)歩(歩)く(く)事(事)

目(目)を(を)見(見)る(る)事(事)

心(心)を(を)使(使)う(う)事(事)

口(口)を(を)開(開)く(く)事(事)

手(手)を(を)振(振)る(る)事(事)

足(足)を(を)踏(踏)む(む)事(事)

馬(馬)は(は)目(目)を(を)見(見)る(る)事(事)

牛(牛)は(は)口(口)を(を)開(開)く(く)事(事)

心(心)を(を)使(使)う(う)事(事)

手(手)を(を)振(振)る(る)事(事)

足(足)を(を)踏(踏)む(む)事(事)

目(目)を(を)見(見)る(る)事(事)

何^{シテ}の事^ニも下^ニに^テ作^ル事^ニ入^ル
款^ノ下^ニに^テ事^ニ入^ル事^ニ入^ル
種^ノ也^ノ志^ノ野^ノ事^ニ入^ル事^ニ入^ル
心^ノ事^ニ入^ル事^ニ入^ル事^ニ入^ル
事^ニ入^ル事^ニ入^ル事^ニ入^ル事^ニ入^ル

事^ニ入^ル事^ニ入^ル事^ニ入^ル事^ニ入^ル
事^ニ入^ル事^ニ入^ル事^ニ入^ル事^ニ入^ル
事^ニ入^ル事^ニ入^ル事^ニ入^ル事^ニ入^ル
事^ニ入^ル事^ニ入^ル事^ニ入^ル事^ニ入^ル
事^ニ入^ル事^ニ入^ル事^ニ入^ル事^ニ入^ル
事^ニ入^ル事^ニ入^ル事^ニ入^ル事^ニ入^ル
事^ニ入^ル事^ニ入^ル事^ニ入^ル事^ニ入^ル
事^ニ入^ル事^ニ入^ル事^ニ入^ル事^ニ入^ル
事^ニ入^ル事^ニ入^ル事^ニ入^ル事^ニ入^ル
事^ニ入^ル事^ニ入^ル事^ニ入^ル事^ニ入^ル

此乃...
 此乃...
 此乃...
 此乃...
 此乃...
 此乃...
 此乃...
 此乃...
 此乃...
 此乃...

此乃...
 此乃...
 此乃...
 此乃...
 此乃...
 此乃...
 此乃...
 此乃...
 此乃...
 此乃...

三
岩根の松の蔭の窟り
もききかたの又かた
分載の福あく和踏也
葛城の山はくさくさ
の狼のしほの葛城の山
作あつてはくさくさ

あつてはくさくさ
は方つてはくさくさ
位女あつてはくさくさ
は方つてはくさくさ
あつてはくさくさ
は方つてはくさくさ
あつてはくさくさ
は方つてはくさくさ

葛城

昔の浦の端の丘に
たつた家
のまはりの
木々の
影が
まはりの
木々の
影が
まはりの
木々の
影が

たつた家
のまはりの
木々の
影が
まはりの
木々の
影が
まはりの
木々の
影が
まはりの
木々の
影が

影が

Handwritten musical notation on the right page, consisting of several lines of notes and rests. The notation is dense and appears to be a single melodic line. There are some markings above the notes, possibly indicating fingerings or dynamics.

Handwritten musical notation on the left page, consisting of several lines of notes and rests. The notation is dense and appears to be a single melodic line. There are some markings above the notes, possibly indicating fingerings or dynamics.

指の標心城の事

あつちの事

扱ひの事

山田藩の事

申す事

か標心城の事

葛城の事

か標心の事

あつちの事

あつちの事

あつちの事

あつちの事

葛城

あなごころのまはるく
春の夜の独りて
たそがりの味を
もぐりて
の行ひきつて
秋意城のまはるく
和光の影

葛城

美岩橋

あなごころのまはるく
春の夜の独りて
たそがりの味を
もぐりて
の行ひきつて
秋意城のまはるく
和光の影

葛城

美岩橋

り并カサシるあはれさかむかむか
して真葛メノクサのつらさ
交ヨクるあはれさかむかむか
れに執ツクるあはれさかむかむか
言コトふあはれさかむかむか

二ツモス
岩橋イハハシのあはれさかむかむか
も、つらさかむかむか
一ツモス
り、あはれさかむかむか
か、あはれさかむかむか
るはあはれさかむかむか

ふかき入道よ

當摩

深き教へり家まきり
くまの道よあまよ
の行者みくぬ我汝度ニ熊野
よまの道よ同道よ
よの和路よあらり當摩の市

佛の御心は、
く海にわたる路の國々を
あつたてて、
ありて、
しるすの
二

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、
十一、
十二、
十三、
十四、
十五、
十六、
十七、
十八、
十九、
二十、
二十一、
二十二、
二十三、
二十四、
二十五、
二十六、
二十七、
二十八、
二十九、
三十、
三十一、
三十二、
三十三、
三十四、
三十五、
三十六、
三十七、
三十八、
三十九、
四十、
四十一、
四十二、
四十三、
四十四、
四十五、
四十六、
四十七、
四十八、
四十九、
五十、
五十一、
五十二、
五十三、
五十四、
五十五、
五十六、
五十七、
五十八、
五十九、
六十、
六十一、
六十二、
六十三、
六十四、
六十五、
六十六、
六十七、
六十八、
六十九、
七十、
七十一、
七十二、
七十三、
七十四、
七十五、
七十六、
七十七、
七十八、
七十九、
八十、
八十一、
八十二、
八十三、
八十四、
八十五、
八十六、
八十七、
八十八、
八十九、
九十、
九十一、
九十二、
九十三、
九十四、
九十五、
九十六、
九十七、
九十八、
九十九、
百、
百一、
百二、
百三、
百四、
百五、
百六、
百七、
百八、
百九、
百十、
百十一、
百十二、
百十三、
百十四、
百十五、
百十六、
百十七、
百十八、
百十九、
百二十、
百二十一、
百二十二、
百二十三、
百二十四、
百二十五、
百二十六、
百二十七、
百二十八、
百二十九、
百三十、
百三十一、
百三十二、
百三十三、
百三十四、
百三十五、
百三十六、
百三十七、
百三十八、
百三十九、
百四十、
百四十一、
百四十二、
百四十三、
百四十四、
百四十五、
百四十六、
百四十七、
百四十八、
百四十九、
百五十、
百五十一、
百五十二、
百五十三、
百五十四、
百五十五、
百五十六、
百五十七、
百五十八、
百五十九、
百六十、
百六十一、
百六十二、
百六十三、
百六十四、
百六十五、
百六十六、
百六十七、
百六十八、
百六十九、
百七十、
百七十一、
百七十二、
百七十三、
百七十四、
百七十五、
百七十六、
百七十七、
百七十八、
百七十九、
百八十、
百八十一、
百八十二、
百八十三、
百八十四、
百八十五、
百八十六、
百八十七、
百八十八、
百八十九、
百九十、
百九十一、
百九十二、
百九十三、
百九十四、
百九十五、
百九十六、
百九十七、
百九十八、
百九十九、
百十、

新編

Handwritten text in a cursive script, likely a musical score or a list of names. The text is written in a fluid, connected style with various flourishes and accents. It appears to be a list of names or titles, possibly in a non-Latin script like Arabic or Persian, though the characters are highly stylized and difficult to decipher. There are several lines of text, each starting with a small symbol or character.

Handwritten text in a cursive script, similar to the one on the right page. It consists of several lines of text, written in a fluid, connected style. The text is arranged in a vertical column, with each line starting with a small symbol or character. The script is highly stylized and difficult to decipher, but it appears to be a list of names or titles, possibly in a non-Latin script like Arabic or Persian.

此の世に於ては、
 一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、

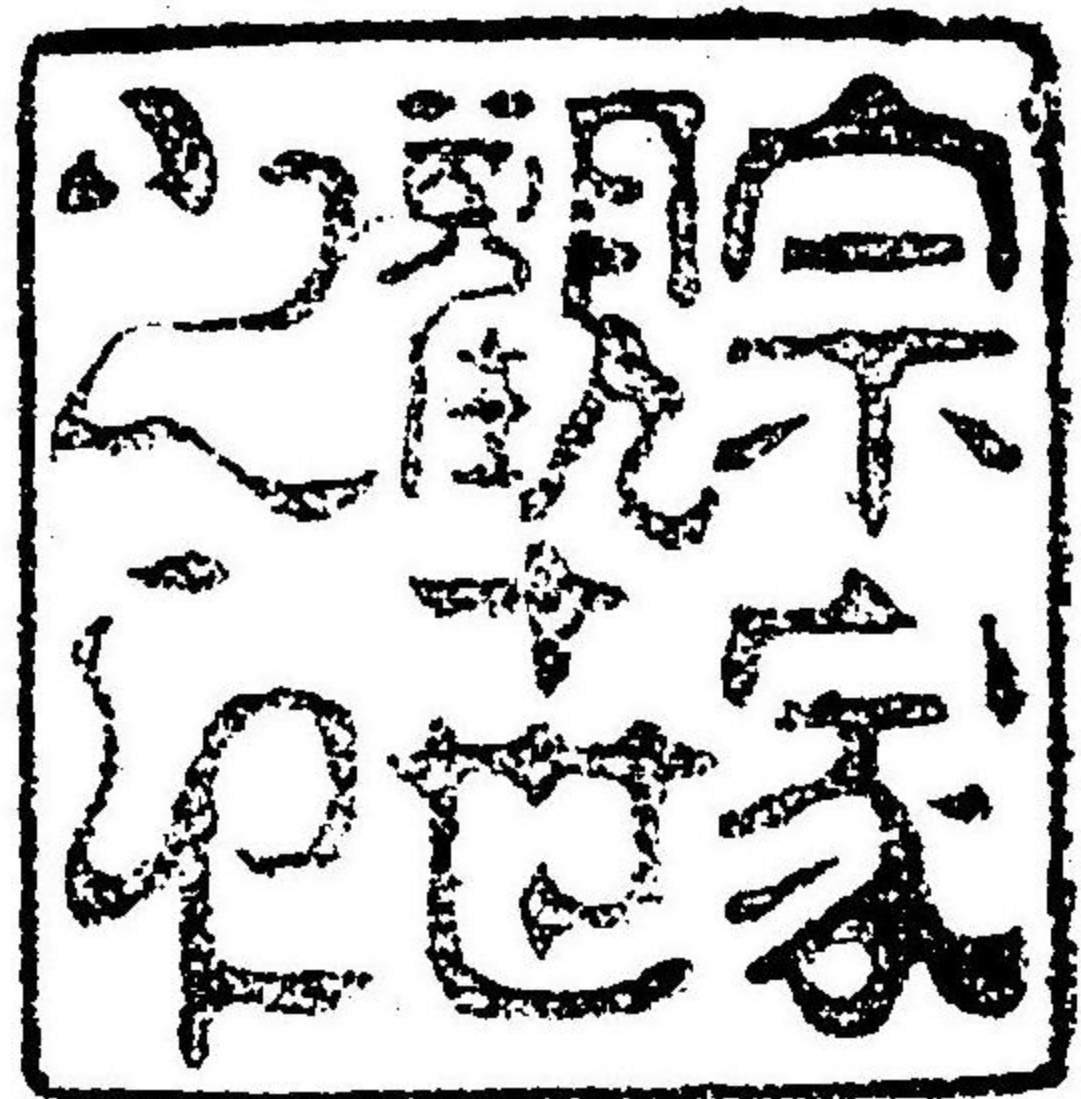
此の世に於ては、
 一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、

ハ聴寶刹の耳又又て王カ蕭セツ
然とある曉の心ト誠マコトの言コト
道ミチなひヒくク老オホの心ココロカキオ
覺サトべベくク也ヤ時トキ人ヒトの心ココロ
成ナリるルおオのノ身ミのノ解トキのノ解トキ出デ
經キヤウのノ心ココロをヲ持テ取ル

不フ措ソ為一切世間説法トク信シン
急キヤク法ホフ是コト為ニ甚シ難ナン矣ヤのノ
法ホフのノ心ココロをヲ持テ取ル
るルのノ心ココロをヲ持テ取ル
頼タノめメのノ心ココロをヲ持テ取ル
悲ヒ加カ祐ユのノ心ココロをヲ持テ取ル

255
77

版權所有



明治四十年七月二十日印刷
同 四十年七月廿五日發行

東京市牛込區新小川町三丁目十番地

訂正者

觀世清廉

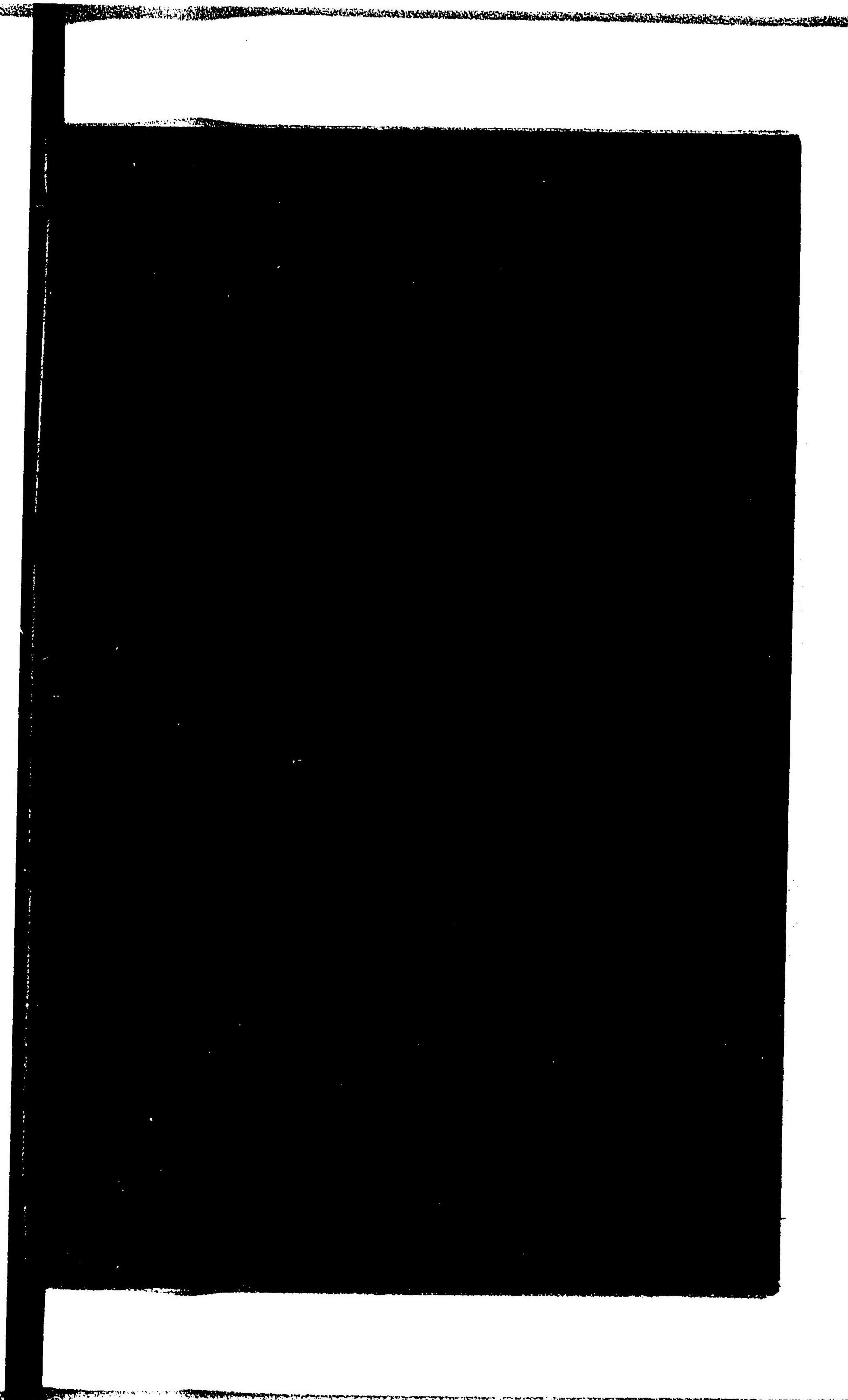
(電話番町三言十番)

京都市二条通麩屋町角十二番

發行兼
印刷者

檜常之助

(特電話番町三言十番)
(振替貯金三言五式)



特42
2/
444

255
77

